

会見内容

午前 10 時 59 分 開始

【広報広聴課長】 それでは、開始に先立ちまして、きょう初めてこの会見に御参加いただきました時事通信社福井支局の野中記者をご紹介します。

【記者】 時事通信の野中です。よろしくお願いいたします。

【広報広聴課長】 それでは、皆様おそろいのようなので、まだ 1 分ほどありますけれども、30 秒ほどですかね。始めてよろしいでしょうか。

それでは、市長からごあいさつと事業の発表をよろしくお願いいたします。

【市長】 11 月の定例記者会見でございます。大変ご苦勞さまでございます。

ところで、10 月 21 日、快速電車が入ってまいりました。おかげさまで天気にも恵まれて、また報道各社の皆さん方にも大変お世話になりました。また、関係市民の皆さん方にも大変なご協力をいただいて、大成功にお迎えができたのではないかというふうに思っておるところでございます。

私いつも言うておりますけれども、これはスタートでございまして、その後も J R さんの発表等々によりますと、おかげさまで乗降客も増えておるということでありますし、あわせて特急も増えておるということで、大変ありがたい状況でございます。

何としてでも今後も 3 カ月なり半年なり、いろいろと検証しながらその数字をよく私も把握をして、またその数値目標を立てて、1 年、2 年、3 年、5 年と末永く直流化をしたことによって敦賀のまちに多くのお客さんが訪れていただきますように、これからも最大の努力をしていきたいなというふうに思っておるところでございます。

関係いただきました皆様方に重ねてお礼を申し上げますとともに、今後ともまたいろんな観点から御支援をいただきたい、このように思います。

それでは、私の方から事業発表ということでさせていただきます。

第 42 回の全日本菊花連盟の全国大会、敦賀大会でございます。敦賀にも本当に菊に熱心な方がたくさんいらっしゃいまして、全国で賞をとっておられる方でございます。全国には菊の愛好者たくさんおられますけれども、4000 点が集められましての会展でありますから、これも直流化の一つの事業として、また多くの皆さん方が快速電車での敦賀に寄っていただけたらなと思っております。詳しくは、ここに書いてありますとおり 11 月 10 日から 11、12 日ということで開催をしていただく予定でございます。

次は、雪のシーズンということで、除雪計画を立てました。去年の長期予報でも暖冬であるという予報が出たんですけれども、12 月に入りまして早々から大変な雪になってしましまして、大変ご迷惑をおかけしたこともございます。私どもも長期予報をあてにせずに、やはりいつ降っても大丈夫であるという体制を整えていきたいなということで、このような形での除雪計画を立てさせていただいて、少しでも降った場合には市民生活に支障を来さないように最大の努力をしていきたいなというふうに思っております。

特に、この際におきましては民間の皆さん方、土木協会、また造園、そして管工事組合

の皆さん方に大変にお世話になっております。しかし除雪になりますと非常に苦情が多い。前も土木協議会の皆さん方とお話し合いもしたんですけれども、私ら寝んと一生懸命やっておっても文句を言われるということで、非常につらい目をしておるといってお話も実は出ておりまして、ぜひ一生懸命やっておられます皆さん方の気持ちも理解いただいて、市民の皆さん方、ある程度辛抱していただくところは辛抱していただくこともお願いしたいなと思っているところであります。

私の方からは以上です。

【広報広聴課長】 それでは、今市長から2件につきまして発表をいたしました。この件について質問がありましたら受けさせていただきたいと思えます。

それ以外の質問につきましては、後ほど質疑応答の時間に受けさせていただきます。

まず幹事社さんございますか。

【記者】 菊花大会につきまして、敦賀では2度目ということなのでしょうか。

【市長】 25年前に一遍やったと思うんです。

【記者】 県内ではどうですか。

【市長】 調べてみますが、敦賀が初めてではないですね。

【記者】 前回の菊花大会は何が契機で開催されたかというのはわかりますか。

【市長】 25年前ですか。また調べておきます。

【広報広聴課長】 慣例によりまして、記者クラブに未加盟社の方もご発言いただいて結構だということでございます。ございましたらお願いします。

【記者】 除雪計画なんですけれども、これは例年と何か違うところはあるんですか。特別に何かするとか、そういうわけではないですか。

【市長】 大体例年どおりです。何か去年と変わったことあるか。建設部長、何かあるか。

【建設部長】 私の方から御説明させていただきます。

例年より変わりました分は、土木業者の除雪機械が少ないということで、今年度より市からリースをいたしまして6台分、業者に貸しつけるという体制をとっております。

以上でございます。

【記者】 市が貸し付けるというのは、市にはオペレーターいるんでしょう。

【建設部長】 いや、オペレーターも貸与という形で。

【記者】 オペレーターも貸与するんですか。

【建設部長】 はい。オペレーターは業者の方をお願いする。

【記者】 機械だけ。

【建設部長】 はい。機械だけ貸与。

【記者】 今まで市が持つて分は、今までは市の職員さんが除雪していたんですか。

【建設部長】 市の除雪車は現在1台しか所有しておりませんので。

【記者】 6台というのは、業者に市が借りるということですか。

【建設部長】 はい、そうです。リース屋さんというんですか。

【建設部長】 そこから機械を借り上げて、業者にそれを貸与するという形をとります。

【記者】 リース代は市が負担するということですか。

【建設部長】 はい、そうです。

【記者】 どのぐらいですか、予算は。お金どれぐらいかかるんですか。借りるのに。

【建設部長】 ちょっと見ておらんですけれども。ただ、リースそのものが 300 万から 400 万ぐらい。

【助役】 これは敦賀だけが特別ではないですね。

【記者】 それとちょっと関連があると思うんですけれども、去年 J R が木が倒木したりして、ずっと動かなくてすごく困ったことがあったと思うんですけれども、それに関連して何か、その管理というのはやっぱり J R がするものであって、市としては何もタッチはしないものなんですか。

【市長】 基本的には J R さんがその教訓を生かして、例えば J R の管理しているところの木でしたら夏場のうちに倒れんように切ったりしておるんですけれども、民有地のところはやっぱり手が出せんというようなことを言っていましたので。例えばそれが市有のところにレールが走っておって、それでしたらうちで倒れんようにはしたいと思うんですけれども。うちらで走っておるところはあるやろうか。ないこともないと思うんですけれども。そのあたりは去年の例がありますから、ああいう倒木で電車が止まるというようなことにはしていききたいと思っています。

J R さんも、それで大分今年の夏も気を使って、木をうまく切っています。

【記者】 除雪に関連してなんですけれども、去年よく国道 8 号とか北陸道とかがスリップとかで立ち往生することがあって、僕も何回か帰れなくなったことがあったんですけれども、県が迂回路の国道 2 つを重点の除雪に決定するのをこの前決めています。そういったあたりの協議は何かなされたり、話し合いとかはしていますか。

【建設部長】 国、県、市の打ち合わせにつきましては、今月の 17 日に。県内の打ち合わせは 11 月 1 日に終わりましたので、それを元にして土木事務所管内で 11 月 17 日に打ち合わせをやるということです。当然その中で、先ほど質問ございました国、県、市、連携しての話題があろうかと思います。

以上でございます。

【記者】 去年は大分被害が出たと思うんですけれども、去年の被害額なんていうのは市としては出ているんですか。倒木とかいろいろ、道路とか。去年の。

【建設部長】 私の方ではちょっと。被害につきましては防災の方なので。我々は除雪を実施する部署ですので。また調べて連絡はさせていただきたいと思います。

【広報広聴課長】 事業の発表 2 件については、もう他に御質問ございませんか。

それでは質疑応答に入りたいと思います。

【記者】 直流化に関連してなんですけれども、3 連休とか駅とかのぞきにいきましたら結構人も歩いてたんですけれども、実際、例えば松原とか気比神宮とかさかな街とか、

そういったところに何人来たとか、西福寺に何人来たとか、そういった数字というのは把握されているのかというのが1点と、3カ月、半年ごとに検証をしていくということですけれども、具体的に例えば乗降客にアンケートをとるとか、その辺の具体的な検証の方法というか、これからが大切だと思うんですけれども、その辺はどのようにお考えなのか。

【市長】 今、具体的にそれをどうふうに、どういう検証をしていくのが一番いいかというのは今やっているんですけれども、まずJRさんに聞くと、これは大体わかるんですね。切符を買って直流で乗ったのは何人とか、具体的な数字がつかめますし、それと駅前通りの商店街等の利用。前も新聞の方では2、3割お客さんが増えたと。飲食店の皆さん方も2、3割増えておるといふようなことも聞いていますので、そういうような数字。

ただ、観光地の……。

【助役】 博物館とか山車会館はわかります。

【市長】 分かるんですけれども、西福寺とか入館券の発売しておるところは案外分かるんですが、無料のところというのはチェックがなかなか。人を配置して数えればいいんですけれども、それもできないもので。大体、例えば博物館が何割増えているとなると、これは不思議なもので大体連携してそんなものかなと思うんです。あそこだけ増えて、ほかが減っているということはまずないものですから、数値の把握できるものは把握していこうかなと。

博物館も大体数分かりますし。

【助役】 港駅舎もわかります。3カ月ごとにみんなにお知らせすると。

【記者】 3カ月ごとに今後発表があるんですか。

【市長】 そうですね。大体、具体的な数字分かりましたら発表なり連絡していきたいと思えます。

その数値をやはりちょっとでも増やすのが大事だと思いますので。また上下はすると思えますけれども、その時々によっては。

【記者】 直流化に関連してなんですけれども、人数は増えているみたいで、周遊バスなんかもすごく人が予想よりも多かったみたいなんですけれども、新快速で敦賀に観光に来た場合、当然ながら自動車であってないので観光地を回る足がないわけです。例えばリラ・ポートみたいな離れたところに行くにしても、どうしても周遊バスとかコミュニティバスを使うしかないわけなんですけれども、どうしても短い滞在時間の中で回るには便数が少ないという不満が大分多いようなんですが、そのあたり何か協議されたりとかするお考えはありますか。

【市長】 確かに乗れなかった、そして周遊が1時間ですから、目的がもしリラ・ポートへ行きたいとなると、ぐるぐる回って行くんじゃなくて直に行きたいというのは利用者の方のニーズでしょうから。臨時バスも出したりはしておるんですけれども、まだ分かりますが、例えば個別にリラ・ポートコース、何々コースということができれば、これからまたアンケートなども取らせていただいて、例えばリラ・ポートコースだけでもバスを出

しても十分乗ってくれるのであれば、そういうものも考えていきたいなと思います。

先ほども言いましたアンケートの中にも、そういうものもちょっと含めて、来た人に、どういうふうな目的で来られましたか、どこを見たいですか。そこに例えばリラ・ポートが多い、気比の松原が多いとなれば、またそういう駅に着いたときに、時間に合わせてリラ・ポート方面というのであれば、そこにすぐ行けますので。そういうものもまたアクセスの方法かなと思っています。そういうものも含めて検討したいと思います。

【記者】 市長も乗っておられた自転車タクシーなんですが、あれはどうですか。盛況だったんですか。

【市長】 いや、まだ実は運用というのは、まだ認可がおりておらんのではないかな。

【助役】 構造改革特区の関係がありまして。

【市長】 というのは、商店街のあそこを走れるようにということで今申請しているんです。特区の中で。というのは、国道8号とか走っておっても怖い。車がどんどん来て、あんな軽いものですから、もし接触でもしたら怖いので、歩道を走れるように許可を特区で願いを出していますので。県の方でも検討していただいて、これは何とか下りそうです。それが下りたら、値段はちょっとまだわかりませんが、1回幾らかで、またシルバーさんなど、いろんな人のお力を借りて走らそうと思っています。ゆっくり回るやつで。

今現在それがないもので、ちょっとやってないんです。これは第何弾、何弾で、またポイントでやめますので。土日とか祝日にはそれで回れるようにしたいと思っています。

リラ・ポートへ行けとって、あれで行くと、ちょっとえらいです。最後の坂で上れんようになってしまいますので。

【記者】 めどはどれぐらいかわかりますか。

【助役】 ちょっと今、仕組みをつくっているんですけども、もう少し時間がかかります。

【産業経済部長】 できれば4月1日からしたいとは思っています。

【助役】 4月1日から実施なんだけれども、まだその仕組みが合意できていないものですから、それを目標にやります。

【記者】 目標にするとっても、まだ認可もおりてないんですよ。それは物理的に時間的に可能なんですか。

【助役】 特区申請が果たして、今言われるのは4月1日が目標だけれどもおりるかということですね。

【記者】 そうですね。営業を始めるには、それより大分前に下りないと。

【助役】 次回、こういうときにきちんと説明ができるようにします。

【記者】 直流化の利用率、乗降客の数なんですが、JRがこの前金沢支社の方で発表がありましたけれども、それ以外に市の職員の人やJR、電車に乗ったときであるとか、あるいは駅の周辺をぶらりと歩いて行って、駅から下りてきた人の数を見た印象とかで、市の方として把握している印象ないし数字としては、時間、曜日によってどれぐらいの利用

率だというふうに見ておるんですか。

当然、商工関係の人、あるいは新快速の準備室の関係の方は、当然、駅の周りを見たり実際乗ったりしていると思うんです。

【市長】 私も極力、仕事で土曜日でも日曜日でも出たときに、駅とか気になって気になって、駅をぐるっと回って行くんですが、やはり普段よりは人が、例えばバス停のところでうろうろしていたり、例の縁結び茶屋なんかでも人が入っていったりしますので、やはり直流化になって人はそこそこ来ているかなという雰囲気はつかんでいますけれども、具体的に何人というのは結局はJRさんの発表の人数のとおりだと思いますので。

それと関連してというか、さかな街なんかも結構人が来ている言うんです。電車で来ているのかというと、そればかりでなしに逆に敦賀というのはアナウンス効果といいますか、駅なんかで快速になったかという記事も出ますので、電車で行かんでもわしは車で行くわという人が車でも来ているみたいなので、その辺のはっきりした数はまだ、車で来ている人がどのくらいという把握はしていませんけれども、それでもさかな街んかの話ではちょっと増えているような気がします。やっぱり相乗効果というのはあるのかなと。電車だけじゃなくても車でも来てくれている人が少しいるのかなという気はしています。

【記者】 具体的な、例えばよく言われる4両編成で180座席、550人乗りと言われていてものの乗車率というんですか、そういうのは商工の方とかで、例えば誰かが乗ったときの印象とか何かないんですか。

【記者】 新快速に乗った方はおられますか。1人ですか。

【市長】 うちらは来てもらうのが一生懸命ですから。

【助役】 東京へ行ったとき米原で新快速を見ましたが、みんな立っていますね。

【記者】 それは何時ぐらいの。

【助役】 私の場合は先週の金曜日の夕方でした。米原発の、切符を予約してありましたけれども、よっぽど乗ろうかなと思ったぐらいです。随分立っておられました。敦賀へ向かう、敦賀行きと書いてありました。

【記者】 ピンポイントとかで聞くと、乗車率は50%、60%というようなふうに言う人もいます。特に午前中とか見ると、がらがらです。特に朝、敦賀をたつ便とかは、ほとんど早朝とかはがらがらです。550人乗りでも10人、20人しか乗っていなかったりする。

【助役】 上りですか。

【記者】 上りですね。

【市長】 うちの嫁の友達が大阪へ行くのに朝6時ので行ったと言っていましたけれども、料金は半分以下ですから。ただ、私どもも便利になってたくさん買い物に出ていくんじゃないかという心配もしていましたけれども、そう影響がないのかなと。普段どおりの。もちろん行く人は行きますし。ただ、今は来てくれる人の方が多いものですから、それを何とか維持できるようにとは思っています。

行く人は当然、仕事で行ったり遊びで行ったりしますし、6時台のやつですとかなり便

利で、帰りが向こうが6時が最終ですから、向こうへ着くのが朝の8時過ぎに着くでしょう。結構、大阪なんかでぶらっとして帰ってこれますので、それもおいおい利用する人もおもしろいでしょうけれども。

私どもは向こうへ行く話は余り関心がなくて、来る話に関心がありますので、大いに来てもらうように頑張ります。

【記者】 今の話なんですけれども、外から人を呼ぶというのも大事なことだと思うんですが、ウィークデーは普段の市民の足としてどのぐらい使ってもらえるかというのが非常に大事な話だと。市としては、市民が新快速を利用してもらうためにはどんな、例えば滋賀へ行くと、琵琶湖の快速鉄道なんてみんなが乗らなきゃ実現しないとか看板がぼーんとつくってある。ああいう例えば市民向けの利用者数の増の取り組みは何かしないんですか。今のお話だと、しないというふうに取れるんですが。

【市長】 確かに利用するということが大事だと思います。小浜線もそうなんです。乗ることによってJRさんも潤いますし、またその地域も潤いますので。ただ、今までも関西とのつながりの深いところでありますので、市民同士といいますか、市民はどちらかというと都市部へ出るし、買い物なんかにも行っていますから。

ただ、うちの心配事というのは、先ほども言いましたように、特に地元の商店街の皆さん方は買い物にようけ出ていってしまうんじゃないかという心配がある中に、市としてどんどん行きなさいというのはちょっとやりにくいかなという気はします。

【記者】 何かもったいないですね。例えば高月なんかは駅で切符を宅配してくれたりする制度とかありますね。高月駅で。行政がそうやってもっと利用者を増やすという意味では取り組みが必要だと思うんですけれども、それはやらないということなんですか。

【市長】 やらないというか、例えば今の環境問題の中で、パーク・アンド・ライドとかそういうシステムで、例えば車で行くのなら新快速で行ってもらうというのが大事ですから、そういう意味では大阪へ行く、京都へ行く場合にはぜひ新快速で行きましょうと。そういうもので、例えば別に行かんものに行くんじゃないくて、車で行く人なんかは逆に新快速を利用してくれという、そういうものはしていくのは方法かなと思います。そういうような提案は。

【記者】 例えば新疋田駅なんて、あれだけ駐車場がたくさんあるわけじゃないですか。あれも全然PRがないですよ。

【市長】 今まではよく今津やらあっちに行って車止めて行っていたでしょう。快速が通ったので、あそこにとまって……。把握してるか。

【産業経済部長】 してないんですが、かなりとまっているという話は聞いてはいます。

【記者】 結局、かなり止まっているとか、すごい増えているとか漠然とし過ぎていて。

【市長】 快速電車の場合、疋田は絶対に増えると分かっておったんです。というのは、駐車料金が要らない。今津なんかもそうだった。駐車料金が要らんから今津まで行って、車をとめて快速に乗って京都へ行ったんです。

ただ敦賀の駅ですと駐車無料とかありませんから、疋田へ止まって行っていらっしゃると思いますけれども。そういう意味では敦賀で乗るのは少ないかもしれません。疋田へ行く結構乗っている可能性がある。

【記者】 可能性ですか。

【市長】 調査しますけれども。一度そういう具体的な数字も調べてみます。

【記者】 この前、鉄道評論家と言われているＪＲの交通に詳しい人にちょっと話を聞きましたら、１時間に１本の便を確保する最低条件というのは乗車率を１００％にすることだと。それで座席が満席ですね。１８０座席で１８０人乗っていると１時間に１本ぐらいの便を確保してとんとん。それは最低条件という言い方をしていました。

私の印象では、とても１００％になっていない感じがして。平均でならせばですが。そうしないと減らされるというようなことを言っていました。そういう懸念はないんですか。つまり、今だと何となくダイヤ改正とか、もっと増やすとかいうことを要望するとか、この前の今後の課題として増やすということでしたが、逆に、こんな利用客の低さでは便がもっと減らされるという恐れがあるんじゃないですか。

【市長】 これはＪＲさんの経営方針もありましょうし、例えばすべてがもうかるんじゃないくて、ある程度、不採算だけれどもこちらでもうかっている分を補てんしながら、足として必要な部分ということで。私は削られないというふうに思っていますけれども、ＪＲも民間で経営をやっていますので、極力利用するということは大事だと思いますので。

利用促進ということについては、当然、来ていただければ帰りますし、逆にまたこちらから乗れば往復になりますから、そういう点では利用促進ということについては、あわせてまちの活性化につながりますから、努力したいと思います。少しでも入りますように。

【記者】 その鉄道アナリストの人は、例えば市長が職員に命令して、出張はマイカーをやめて全部電車を使えと命令するべきだとか、運行に関しても市が少し補助金を出すとか、それぐらいの決意を示して、つまり利用促進に本腰を入れないと相当厳しいのではないかと。特に湖北と敦賀間というのは完全赤字路線で、普通なら経営的にはあり得ない路線だというふうな分析の仕方をしていたんですけれども。

そういうような静観しているとかアンケート調査というくらいで、こういうスタンスで悠長に構えていていいんでしょうか。

【市長】 まだ始まったばかりですから、こういうことを含めてしっかり検討します。

【記者】 今のに関連するんですけれども、２５本のダイヤが決まって、ふたをあけてみたら朝５時、６時に向こうに行く電車の次が１０時半ぐらいしかなくて、間がないから遅くなってしまうとか、逆にこっちに来た人も帰りが６時台で終わって、ご飯も食べれないみたいな声もあると思うんですけれども、市としてはＪＲ側に、今ない時間帯のダイヤをもっと求めていくということは考えていらっしゃいますか。

【市長】 これは県も同じなんですけれども、県の方も知事もそういうようなことを発言していただいていますし、私どももやはり今の、観光だけということはありませんけれど

も、今のやつですとどうしても通勤とか通学には全く利用できない状況ですし、先ほど言いましたように帰るにしても早過ぎて、晩御飯ゆっくり食べてはいけない状況でありますので、それも含めてＪＲさんのダイヤ改正は必ず年に２回ぐらいありますので、その場合にはお願いしたいと思います。

今はともかく現時点ではいろんな今の実態を調査して、プラス私どもはともかくもっと乗っていただけるようにこれからもいろんな点で努力はしますが、現時点ではかすかでありますけれども、実績が出ていますので、それプラスもう少し便利になればもっと増えるということをお願いしていきたいと思っております。

【記者】 例えばＪＲと折衝してく上で１日のならした平均の利用者数がこれぐらいだったら改善してくれとか、その辺の折衝というのはＪＲさんと全然してないんですね。

【市長】 まだしていません。

【記者】 どれぐらい増えたら増やしてくれる、どれぐらいだったら減らされるとか、その辺のボーダーというのはしてないんですか。でないと、目標がないと、それに向かって利用者増を進めていくわけでしょう。その辺の計画は今のところ全くないということなんですか。

【市長】 私どもはともかく卵が先か鶏が先かじゃないですけども、ある程度便利になれば増えるんじゃないかという話。要するに、向こうにすれば増えてきたから増便しようというのか、どっちかですけども、私どもは、できればある程度便利な便があれば増えるんじゃないかということで行きたいと思います。

【記者】 だから数字を出せない。

【記者】 今の話、便利になれば増えると。ふやしたから便利にしてくれじゃなくて、便利になればふえるから、とりあえず今のところは目標は立ててないというふうにとらえればいいですか。

【市長】 目標というのはあくまでも先ほど出たように、電車が常に満席で１時間に１本しかないものですから、それを運行してもらうのが一番ベストだと思いますし、ＪＲさんにとっても、これはいいということになりましょうから。

ただ、始発から終点まで満席であるべきなのか、それとも例えば敦賀から乗ってだんだん増えていって中心部になって満席になって、また減っていくという状況もあるんじゃないかと思うんです、電車というのは。最初から満席でつながるわけじゃなくて、都市部に集まって人が増えていって、また都市部から離れると減っていくというのは普通の交通体系だと思いますので。うちはたまたま最初の始発で、確かに人数もそう多くはないでしょうけれども、ＪＲさんに一度聞いてみます。どんなもんやろうと。そんなものではとてもじゃないけれどもという話になるのか、何とか今の状況でもうちょっと増えればいいという状況か。その辺も一度また専門的に聞いてみます。またその辺で改善ができて、ＪＲさんもそれでもうかっていいなということになれば一番いいです。私どもも、もっと便利になってくれれば、また利用も増えるのではないかなというようにお願いしたいと思います。

【記者】 ダイヤ改正に向けたＪＲへの働きかけというのは何月ぐらい、いつぐらいからスタートするんですか。

【市長】 もうぼちぼち、またアポイントをとって今の現況の報告も兼ねて、こういう話も出ているということで報告はしたいと思います。

【記者】 金沢支社に対してまずやるんですね。

【市長】 そうですね。まず敦賀駅を通して、敦賀駅から金沢支社を経て、それからまた本社になると思います。

【記者】 その中では当然、悪評高い午前６時１０分から１０時２３分までないという、４時間もこれはどうにかしようというお考えは。

【市長】 それも何とかお願いしてまいります。

【記者】 あと各駅停車も評判悪くて、スピードを出して途中を飛び越していくみたいなことが３本に１本くらいは、本当の新快速というか、そういうのにはならないんですか。

【市長】 僕もちょっと分からんのですけれども、他の例えば駅、各駅の利用率なんかも一度ＪＲさんに調査していただいて。例えば利用のないところがあれば飛ばしていただくのも方法かなと。ほとんど各駅になっていますので、せめて。

【記者】 １２駅ですよ。１３かな。ずっと止まっていきますよね。

【市長】 せめて半分ぐらい止まらんと、時間的にいうと１５分くらい変わります。もっと変わるかね。

【記者】 地元の自治体が文句を言う。絶対止まれ、止まれと。

【市長】 許さんというやつですか。

【記者】 もう通してくれん。

【助役】 こっちは非常にそれで利便性あるんだけど、あっちにとってみたら。

【記者】 だから今までの乗っている時間は同じ。乗車時間は。ただ乗りかえとかそういうのがなくなった分だけ早くなっているように設定されている。

【市長】 他の自治体のことを言えませんが、例えば時間帯によっては、だれも乗らん。止まっても誰も乗りおりをせんというところがあれば、またご理解を得て、ある程度走ってもらった方が、うちらはありがたいんですけども、記者さんおっしゃるように、他の自治体がそんなことしたら許さんというところもあるかもしれん。そこは何とも言いにくいところなんですけれども。

【記者】 利用状況なんですけれども、観光協会の方は敦賀駅でおられる方が何人ぐらいかというのは主要な便に限ってはカウントしていると思うんですけども、ＪＲとかにダイヤ改正の要望を出すときに、市としてはＪＲの調査したデータに基づいて話し合うわけですか。市商工観光課とかで独自に調べたりしないんですか。全部あっちが出してくるデータのままで話をするんですか。

【市長】 そうですね、特急も増えているということは、例えば来るときには快速で来て、帰りは間に合わんで特急で帰ろうという人もおりますから、そういうデータ、総合的に。

でも実質的にはＪＲさんのデータというのは間違いないです。切符買って乗っていますので。だからそれはデータの的にはＪＲさんのデータでいいと思います。

【記者】 どこからどこまで乗っていたかという話になるとＪＲじゃないと分からないと思うんですけども、話し合いをするときに市として調べた結果みたいなものは別にあるのか。それを調べるつもりとかはないんですか。

【市長】 イコールですから。さっき言ったように車で来る人もいらっしゃいますし、飛行機で来る人はおらんにしても、大概あと車か電車しかありませんので。やっぱりＪＲさんのデータが一番、電車に乗ってきたというのが一番分かると思います。

【記者】 一応、新快速からおりたのが何人かというのはカウントしているみたいですね。観光協会で。

【市長】 それはしていると思います。

【記者】 そういうのは使わないで、全部ＪＲの方でのデータを用いて話し合うんですか。

【市長】 はい。

【記者】 最後の利便性向上の問題でいうと、ＩＣＯＣＡが使えないというのも相当不便だと。特に来る人はそれが結構重要で、大阪とか兵庫とか近畿圏で物すごい利用率なので。大都市近郊区間のエリアの問題もあって、近江塩津のところまで大都市近郊区間で、あと新疋田、敦賀。新快速でアーバンネットワークとか言いながら大都市近郊区間に入っていないという問題とあわせて。

【市長】 恐らく改造するのに多少のお金、多少じゃないか。どのくらいかかるんやろう。

【記者】 自動改札があれば連結するでしょう。

【市長】 これもＪＲさんをお願いして、何とかうちも入れてくれということで。恐らくこれ（金）の問題が出てくると思います。

【記者】 市がということですか。

【市長】 応援できるところは応援してでもなってほしいなと思います。

【記者】 福井も金沢も自動改札じゃないですね。

【助役】 違いますね。金沢支局内にはないですね。

【市長】 金沢支局はないんか。

【助役】 福井もないですね。

【市長】 全体として、せめて富山なんかまで全部そういうふうにしてほしいですね。ＪＲさんも戦略で、ＩＣＯＣＡにＳｕｉｃａにもう１個何かつくらんなあかんね。それもあわせてＪＲさん全体の問題として、うちだけじゃなくて金沢支局内にはないというんですから、そういう話もしてみます。

【記者】 開業後の今後なんですけれども、遊敦塾とか聞くと、よく人が集まらずに低調に終わっていると聞いておりますし、新たにソフト事業の目玉として遊敦塾というのをとらえられたと思うんですけれども、他に例えば次なる一手といいましようか、観光客を定期的に安定的に呼び込むための次なる一手といいましようか、その辺は今の時点では余り

ないなと思うんですけれども、その辺は何か考えられていることがありますか。

【市長】 遊敦塾のその問題、把握しているかな。一時ちょっとイベントが多いときには、ちょっと低調なところがあったんですけれども、その後はどんなものか。

【産業経済部長】 今9回やりまして、そのうち台風の関係と、今言われました21日のほかのイベントがたくさんありましたので、その関係でやめさせていただいたのと、もう1回、11月3日が中止。3回やめさせていただいております。

【市長】 あと、ほかのところとの連携で、前も長浜の川島市長ともお話ししたんですけれども、例えば長浜へ来た。一足伸ばしてもらって敦賀へ来てもらうとか、高島も幾つか駅ありますけれども、高島の方に。あそこらも観光で一生懸命やっていますので、そこへ来たら一足伸ばしてもらう。もう一つ先が敦賀ですから。そういう運動を連携して。

例えば敦賀まで来るツアーもありますけれども、それを何かでこちらがサービスをする。スタンプを押して、そういうのを抽選でやるとか。今そういうのはちょっと模索しています。

【記者】 原発関係ですけれども、全原協、その後あちこちプルサーマルとかいろいろ認めているところが結構出てきたんですけれども、それに関して全原協自体は何か動きとか、来年度の動きとか、何か計画とか変わったところは。

【市長】 全原協とすれば、ある程度、プルサーマル等については個々の自治体、県内自治体で判断をされておりますので、全原協全体として今どうしようということはありません。ただ、福井県の中では高浜さんが昔一応そういう話あって、今頓挫していますけれども、敦賀だけに関して言えば、まだ全然その話がないもので。ただ全原協としては、とりわけ会全体というああやろうというのはありません。

【記者】 この間、原電ですか、企業誘致ですね。その辺に原電のいろんな技術供与というか、技術をできるだけ地域の来る企業に提供してもらってというようなことをこの間おっしゃっていたんですけれども、会長が来られたときに。例えば今予定はあるんですか。企業誘致で何か原発関係の技術を駆使してというか、あるいは技術供与を受けて進出したというような企業は。

【市長】 産業団地の方にはとりわけそういうのはありませんけれども、やはりこれだけの発電所が立地をしていて、若狭湾エネルギー研究センターがあって、また、もんじゅを中心としての原電さんというよりも、日本原子力研究開発機構の方でいろいろ技術をやるということを取り組んでいますので、私どももぜひそういう、具体的などこということはありませんけれども、そういう関連のところがあればぜひ来ていただいて、私どもはただ電気をつくっている地域ではないと。これが拠点化という一つの私どもは位置づけということで、県ともこれから十分。また近いうちに拠点化の委員会もございますので、そういう中で発言をしていきたいと思っておりますが、そういう技術をいろいろ提供したり、またそれを受ける企業があったり、また学術的に研究をしたり、要するに大学とか研究機関というものが私どもの地域にあるということは非常に大事なことだと思っていますので、

そういう点については十分これから私ども市として取り組めることはしっかり取り組んでいきたいとは思っています。

【記者】 今、例えば企業誘致なんかで大きなところ、引き合いとか話はあるんですか。

【市長】 何社か実はいい話もありまして、具体的にはなっておりませんが、結構今2社がぼんぼんと来てくれたおかげもあると思うんです。これは口コミという大変ですが、やっぱり聞くと聞くと。何で敦賀へ行ったんだと。企業同士ですから。こういうことでということもあって、それなら一回行こうかということで、こそっと見に来てくれるところも実は何社かありますので、そういう中からいろいろとお話をさせていただいて決めたいとは思いますが、まだ具体的に調印のどのという話まではいっていません。

【記者】 また決まりかけたら、調印式までにできるだけ早目に発表していただければありがたいんですけども。

【市長】 なかなかこれもそう簡単にはいかんと思いますので、じっくりと構えながら。

【記者】 消防組合の研修の件ですけれども、市長、組合の管理者、責任者としてどう考えていらっしゃるのか。

【市長】 やはり公費の入りました研修でありますから、部外者が同乗していくというのは非常に遺憾であると思っております。今後はこういうことのないように周知徹底をしていきたいというふうに思っています。

【記者】 処分はいつごろになるのか。

【市長】 処分は、きょう実は3時から委員会がありまして、4時に記者発表をまたさせていただきます。

【記者】 消防組合のプロパーの職員は当然処分出来ると思いますが、団はできないんですね。

【市長】 はい、できません。

【記者】 市長として何か処分するということとはできないのですか。

【市長】 はい。

【敦賀消防署長】 私の方からお答えさせていただきます。また4時から発表させていただく予定ですが、消防団につきましては3日付で辞表が出ましたので、処分対象外というような形になっていようかと思います。現在、調整中でございます。

【記者】 あと公費について返還を求めるということは考えていらっしゃいますか。

【市長】 いや、これは例えばその公費が一般的に不当に使われたのであればあれですけども、今のところそういうことはないということでありますので。だから公費を返還してもらうということは考えていません。

【記者】 一般論ですけども、研修が立川であって、夜わざわざ銀座に近いホテルに泊まって、また朝はバスで30キロ、立川に戻っているわけですよね。東京で30キロというと、かなりの距離感じゃないかなと思うんですけども、これについてはどうでしょうか。

【市長】 東京で 30 キロですから、通勤範囲でしょうし、田舎の人間が行くとやっぱりまちの真ん中へ行きたいのも気持ちはわからんでもありませんし。消防団の皆さんというのは本当にボランティアでよく頑張っていただいていますので、そのぐらいは大目に見てあげてほしいなと私は思います。

【敦賀消防署長】 ちょっとよろしいですか。ただいまの件で、私ども調査しました結果、宿泊場所の関係で共済関連の安いところというようなことで、バス代関連は東京まで 30 キロ行っても値段が変わらないというようなことで、宿泊費を安く上げるために選んだというようなことを調査の結果出ております。

【市長】 私の考えと違ったね。わしは田舎者やで、つつい。

【記者】 さっきおっしゃった消防団の辞表なんですけど、それは参加された方全員ということですか。

【敦賀消防署長】 いえ、一番最高責任者の消防団長。

【記者】 各消防団ですか。

【敦賀消防署長】 いえ、敦賀美方消防協会の行事でございましたので、協会長ということで敦賀消防団長の辞表で承認されたというようなことでございます。

【記者】 堂前さんですか。

【敦賀消防署長】 はい。

【記者】 それをもって団の方の処分とういか、けじめは。

【敦賀消防署長】 はい、自主的な処分ということで。

【助役】 何とか消防団の団員を増やすようなPRもひとつお願いします。

【記者】 敦賀 3・4 号なんですけれども、耐震指針の見直しの関係で着工、臨界が遅れるのではないかという話が出ていますけれども、当然遅れると市の財政であるとか地域の経済にもすごく大きな影響が出るかと思うんですけれども、それについて今どう考えているのか。

【市長】 19 年 5 月の着工は難しいというふうに聞いておりまして、ただ具体的にどれだけ延びる、あれだけ延びるというのはちょっと今聞いておりません。事業者の方で検討を行っていると思います。

それと、私どももやはり 3・4 号機の臨界になれば、固定資産のこともありましていろんなことも踏んでおるんですけれども、やはり安全にはかえられませんので、やはり安全第一でやっていただくのが一番良いというふうに思います。

そういう点で、できるだけ早く着工していただければいいんですけれども、時期的なことについてはまだはっきりとした時期は分かりませんけれども、できますれば、まず安全を第一にやっていただいて、そしてそれが確保されれば早く着工していただきたいなと思います。

【記者】 場合によっては長期の財政計画やそういうものを見直さないといけないんですか。

【市長】 その時期についてはっきりすれば、やはりまたそれなりに見直しも必要かなと思います。

【総務部長】 基本的には、財政計画は5年スパンでございますので、そこまで影響をおしはかっていません。

【市長】 大分先やもんね。

【総務部長】 先なんです。

【記者】 原子力関係で、原子力機構とこの前、市が安全協定を改定しましたね。その内容でちょっと引っかかっているところで、廃止措置計画第3条の2という場所なんです、廃止措置計画を原子力機構から報告を受けるという文言になっているんですね。以前の安全協定の文言では、いろんな運転計画であるとか冷却のための主排水の計画などについて、市のそれは承認事項であると。認可というか、認可して、それを市が許可をするという文言になっていたのが、今回の廃止措置、今後ふげんを解体するわけですが、それについては単に報告を受けるという文言にわざわざ文言が変えられているんですが、これはなぜでしょうか。

【企画部技監】 それでは私の方からお答えさせていただきたいと思います。

たしか事前了解となっていて、事前連絡にしたその理由はということだと思います。

特にふげんの廃止措置につきましては、既に平成9年の動燃改革の中で廃止すると。その後どうするかということもある程度決められていたと思います。そして今回、この廃止措置を事前連絡にしましたのは、その内容からいきまして我々がそこまで了解を与えるような内容ではないのではないかと。そういった性格のものではないのではないかと。いうふうに県とも協議をいたしまして、判断をさせていただきました。

【記者】 これは例えば茨城県の東海村でも原子力発電の東海発電所というのを廃炉を初め解体措置計画というのを出されて、例えば茨城県と東海村の場合は合意を得るべき事項というような文言にしているということなんです。それを敦賀市と県が単に向こうから報告を受けるというだけ、そういうスタンスでいいのかということなんです。つまり、市というのは原子力行政事業者のいろいろな確認事項が多かったですから、それに対して厳しいスタンスをとって、一つ出てきたものがあればそれを厳しく見て、場合によっては突き返す。それがだめだったら廃止措置もとめるとか、それぐらいの厳しいスタンスで原子力事業者の事業を監視、チェックするというスタンスをとる。そういうものがそもそも安全協定の趣旨なんじゃないですか。

【市長】 例えばあれを解体することによって、周辺の環境の問題もありましょうし、また従業員の皆さん方の監視体制もありましょう。こういうことにつきましては十分確認はしていきたいと思いますが、先ほど技監の方から話ありましたけれども、やはり了解であるとか同意というのには今度の解体をしていくというのはまた違うであろうということで、そのように判断したというふうに思っております。

しかし、原子力に対する思いというのは変わりません。一緒です。やはり建てる場合で

あっても壊す場合であっても、そのときには安全を第一にしてやってもらうということには全くスタンスは変わっておりませんから。

協定の中では、確かに文言はこうなりましたけれども、基本的、気持ち的には全く安全に対する思いは変わっていないと思います。

【記者】 今後、廃止措置計画というのが原子力機構から出てきたときに、市としてそれを例えばチェックをして、内容があれば厳しく見ていくということはされるわけですか。

【市長】 もちろんこの内容については報告が来ますので、それを例えば了解であるとか、同意ということはありませんけれども、出た方向について、私どものできる範囲の中で、これはこうやってほしいとかということはまた注文をつけると思いますので。そのときにはちゃんとチェックはさせていただきます。

【企画部技監】 追加させていただいてもよろしいでしょうか。

今回も事前連絡ということなんですけれども、これも廃止措置計画自体は非常に長いスパンの中で行われます。従いまして、数十年後のことについて、このような計画で、このような後始末をしますという、そういったきちっとした計画はまだ今のところ未定の段階であります。従いまして、今後もし廃止措置計画の関連で、例えば新たな廃棄物処理のための必要な建物、そういうものをつくるとか、そういう段階になりましたら当然ながらその中に新しい施設の建設とかいうようなことになりまして、当然ながら事前了解の対象ということになってきます。

従いまして、これですべて、廃止措置計画すべてに何も我々は同意を与えないとか了解をすとか、そういうものではありません。やはり安全協定の基本的に性質といたしましては、市民の安全、安心、これがすべて基本になっておりますので、その基本にのっとりまして従来どおり厳しく運用していく。その姿勢は何ら変わるものではありません。

【記者】 例えば当然、今後解体すると数百トンという放射性物質を帯びた大量の廃棄物とか配管であるとかコンクリートとか出てくるわけですね。それは今どこに処分するかということが全く国の原子力行政で決まっていない中で、そのまま場所がないので敦賀にそのまま何十年もとめ置かれるとか、そこで埋めて処分とか、そういうような懸念というのは市長はお持ちでないですか。あるいはそれに対して、もしそうなったときに市としてそれを絶対容認しないのか、それともあえて受け入れてもいいとお考えなのか。

【市長】 廃棄物の適正、先ほど言いました処理とか処分とか、非常に重要な問題ですから、私どもしっかり関心は持っております。そこで、これから先、恐らく今の技監の話ですと20年、30年かかるスパンの話なので、そういう中で、例えばこういう廃棄物が出たと。今直ちに持っていくところがないので、しばらくここにということになれば、いや、どうにもあかん、置くことならんというわけにもいきませんから、そのときの状況をよく見ながら、その時々適切に判断しなくては仕方ないかなと思います。

基本的には、適正に速やかに、あそこがきれいに更地という大変ですけども、きれいになるのを希望します。

【記者】 原発関係ではないんですけれども、奈良市で職員がかなり不適切な休職のとり方があったと思うんですけれども、敦賀市でそういったことに関して実態調査というか、される予定とかはあるんですか。

【市長】 あれも極端な話で、よくあんなことができたなと私も思いましたけれども。

奈良市の例の職員のあつて、うちは大丈夫かなと、すぐ。こっちも気になりますから。

【記者】 実態調査とかされているんですか。

【総務部長】 いや、個別の具体的な調査はやっていませんが、常日ごろそういった注意は喚起しておりますので、大丈夫だと思います。

【市長】 大丈夫です。本当に病気で休職している職員もおりますので。お医者さんがちゃんとした診断をしていますので。

奈良の場合は、診断書を書いたお医者さんはどうなったんですか。その後知りませんが、それでも。

【総務部長】 ああいうことは一切ないです。休暇届は審査しますから。

【市長】 1000 人からおると体の悪い職員もおりますけれども、あんなことはありません。決してございません。

【総務部長】 病名が特定されなくて個別のドクターがいろんな名前をつける、病名をつける可能性はあります。それは特定されませんから、その間にはいろんな病名がつくと思います。休ませるためには診断書を書きますので。その恐れがあるとか、いろんな形で診断書をいただく関係上、個別の医者によって見立てが変わる可能性はあります。それで休暇願の理由が変わる場合もあります。厳密にちゃんとチェックしております。

【市長】 お医者さんも難しい。ここ痛いと言ったら本人しか分からんですから。痛いんだ、何とかしてと言っても、それは本人しか絶対分からん。機械で調べようが何しようが分からん。その人が痛いと言えば痛いんですから、その辺がまた難しいところです。

【記者】 木崎の開発の関係なんですけれども、今回の計画とは別に事前に以前にまた同じようなパチンコ店の申請があったときに、市長さんはそのときは、あそこは文教地区だからというふうに……。

【市長】 あれはまたある議員さんが新聞に好きなことを書いていますけれども、隠す必要がないので言います。あれは敦賀のある業者の方が、申請とかする全く前の話なんです。ともかくパチンコの2号店をあっちにつくりたいと。僕もよく知っている人なので、うちへ来たんです。話ししておったけれども、あそこはできればパチンコはふさわしいない場所だしねとお願いしたら、分かりましたと引いてくれただけなんです。だから申請も何も出ていませんから。それだけだったんです。

【記者】 そのときは口頭で面談して……。

【市長】 口頭で。今回についても。でも今回の場合は、ぼんと出てきたんですから。

【記者】 今回、その前に、出す以前にそういった話とかは全くなかったのか。

【市長】 全くありません。

あっても、同じように、どうか他でやってほしいなと言ったと思いますけれども。

【記者】 例えば前に話が、前の個別で口頭で話をされたときに、ここにパチンコ屋をつくれる状況なんだったらそれは何とかせなならんというふうには市長は思われなかったのか。要は、白地で今、法律的にはつくれる状況をずっと放置しておいたわけですね。そのとき、これはまずいなというふうには思われなかったのか。

【市長】 あれも大分前なんです。3年から4年ぐらい前だったと思うんです。調べればわかりますけれども。かなり前でしたから。その後は、あそこが白地でどうのと、余り出てくるまで私に関心というか、なかったものですから。それはある程度、農業委員会とか通っている話でしょうし、いろいろ他のことでがたがたしている間に、ぽっと出たものですから。

それと、あのとき一番、6月の記者発表のときにやったように、例のボウリングの問題もあったでしょう。ボウリングはないというし、ボウリング場と一緒にできると、ああだこうだありまして、悩ましいなとちょっと言ったんです。悩ましい問題だなと思ったんですけれども、そのうちに何じやらかんじやらとだんだん。当時はそんな、最初は大騒ぎもなかったですけれども、だんだん騒ぎが大きくなったものですから。基本的には他の場所でやってくれば一番いいなと思いましたけれども、しかし法的にはどうすることもできませんし、ある程度、受理して県の方へは申達しましたけれども。

【記者】 市長として、他のところであったらいいんだけどということ、あそこではやってほしくないという思いはあるのか。

【市長】 できれば。

【記者】 結果的にそれができるような状況を放置しておいたわけですよね。それについての行政側の責任というのは。

【市長】 難しいですね。

【記者】 それはやっぱり、あれだけの署名も集まって、議会も全会一致で求めている、そういうのを放置していたというのは責任が問われるとは考えないのでしょうか。

【市長】 放置してきたとは思っていません。責任をと言われますけれども、逆に、止めて……。

【記者】 止める止めないじゃなくて、紙を出せる状況をずっとつくっていったわけですよね。紙を出せば通せる状況をつくっていったということに関しては、責任を感じていらっしゃると思いますか。

【市長】 なかなかそこまでは気も回りませんでしたから。全く責任を感じていないかと。感じていなかったかと言われて、今初めて。感じてないと言うと無責任と言われますし、難しいところで、何ともお答えのしようがないところです。

【記者】 関西電力が1月中旬から美浜3号機を動かすということで、遺族との話し合いをこれから理解を求めるとのことですけれども、隣の町のことはいえ隣接ですけれども、市長としては3号機の稼働については。

【市長】 あれだけの事故を起こされて、本当に犠牲者も出たので、関電さんも慎重に対応されてきたと思いますし、これからも遺族の皆さん方の気持ちをしっかり分かっていただけのような対応を取っていただきたいなと思うのと、やはりあれだけの大きなプラントですから、いつまでも止まったままというわけにはいかんと思います。それだけ電力の必要性もございますので。そういう点では、先ほど言いましたように遺族の皆さん方のしっかりご理解を得て、これから安全に安定的な、そしてやはりあの教訓を生かして、二度とああいうことを起こさないようなプラントとして活動していただけたらと思います。

【記者】 新快速が乗り入れたのを受けて、青年会議所、敦賀駅前のあの大きな看板を新幹線だとつけかえたんですが……。

【市長】 新しい駅の、こういう駅になるというやつです。

【記者】 新幹線という看板では。

【市長】 新幹線は入ってなかったと思います。

【産業経済部長】 それはずっと前からあります。

【記者】 そうですか。

【助役】 張り直したのは駅です。

【記者】 新幹線の敦賀までの、去年、認可申請というのが出ましたけれども、今後の北陸新幹線を市としてどういうスタンスを取っていくのかということについては。

【市長】 やはり新幹線、ぜひまず敦賀までは延伸してほしいというふうに思いますし、申請もちゃんといたしました。ただ、やっぱり新幹線というのはどこかへつながらないと意味がないものですから、基本的には若狭回りということで閣議決定されていますし、そのあたり。といって若狭回りだと非常に大きな莫大なお金がかかる、時間もかかる。暫定的には米原へつなごうという案もありますし、湖西につないだフリーゲージという案もありますから、できましたら一番早くまずつながる方法は何かということを考えていただいて、ある程度の方向性も出す時期が近づいておるんじゃないかなと思います。

【記者】 いろんな政治家が、例えば湖西線回りで大阪へつなげるとか、いろんな発言が出ているんですけれども、市としては一番望ましいルートというのは。

【市長】 なかなか難しいですね。一番早く便利に、まずつながることが大事なかなと思います。

【記者】 どこに。

【市長】 大阪に。大阪にということにしておいてください。

【記者】 まだ微妙な時期だと。

【市長】 はい。

【広報広聴課長】 それでは産経部長から回答だけいたします。

【産業経済部長】 一番最初に菊花連盟の全国大会の件で一つご質問がございましたが、敦賀市がありまして、これが昭和 56 年に敦賀大会をやっております。その後、県内でありましたのが平成 8 年に武生大会を行っております。県内では 3 回目ということになります。

1回目と3回目が敦賀でやっております。

それと、何か冠事業で行ったのかということでございますけれども、昭和55年から敦賀市が花のまちづくり事業ということで着手をいたしまして、これにあわせて56年度に大会を誘致したというふうに考えております。

【広報広聴課長】 では、これを持ちまして終了いたします。

午後0時05分 終了